

書 評

おはなしバイオテクノロジー

松宮弘幸・飯野和美 共著

バイオテクノロジーは、日常生活と係わりの深い産業技術なので、関連記事が新聞紙上に現れたり、専門用語が日常の話題にも登場するが、そのような専門用語の意味を問い質してみると要領を得ない返事に接することが多い。このような経験の持ち主には一読をお勧めする。

書名からも明らかなように、本書は「おはなし科学・技術シリーズ」の一環で、バイオテクノロジーに明るくない人を対象にした解説書であり、素人が日頃疑問に思っていたことの多くに答えてくれ、分かりやすくかつ楽しい読み物である点が特筆に値する。

全編は Part 1~8 に分かれており、1 及び 2 では、「古典的バイオから新しいバイオ」の変遷と古典的バイオテクノロジーが日常生活とどのように結びついているかを、農業、食品、化学、医療、エネルギー等について示してある。

Part 3 は、「新しいバイオに利用される技術」の中核である、細胞融合、遺伝子組み換え、バイオリクターの解説で、Part 4~7 では、農業植物への応用、動物への応用、食品開発への応用、医療とバイオテクノロジーについて解説されており、オレタチ、ポマト、クローン、借り腹牛等の例は素人にもたいへん興味深い。

バイオによる新たな技術の創造が今後種々の分野で期待されているが、Part 8 では将来技術の一つとして宇宙環境におけるバイオテクノロジーが紹介されている。

(横浜国立大学 遠藤 孝雄)

B6判 186 ページ 定価 1300 円

1989 年 10 月 日本規格協会発行

編集後記

父親参観日翌日の月曜日に、息子二人を連れて、うわさの(あまりいいうわさは聞きませんが)花博に行ってきました。一度行ってみようと思いつつ、人の多さ・待ち時間の多さを考えて二の足を踏んでいたのですが、ねらい通り人出は土曜、日曜に比べて(たぶん)少なく、人気のパビリオンでも1時間以内の待ち時間で済みました。

子供達は結構楽しんでいたようですが、花博と銘打った割には興味を引く花や植物の数が少ないように感じました。でも、人間と自然との係わり合いについてはいろいろと考えさせられました。最近熱帯雨林の大規模な伐採や焼畑農業によるCO₂濃度の増加=温室化現象、酸性雨による樹木の枯死、フロンガスに

よるオゾンホールの出現等々、人間の営みによる環境破壊が問題になっています。我が鉄鋼業界はこれまで、公害防止に多大な努力を払ってきており、この点では優良業種の旗頭であると誇ることができると思います。

一方で、鉄鋼石は副原料の採掘等で知らずのうちに環境破壊に加担していることはないか、などと心配にもなってきました。公害防止技術の開発に貢献してきた鉄鋼業も花博に参加してみたら企業イメージが上がったのではないか、環境問題に関し世界から白い眼で見られている日本ですが、鉄鋼業がこの面でもリーダーシップをとっていく必要はないのか、などと考える一日でした。

(H. Y.)